

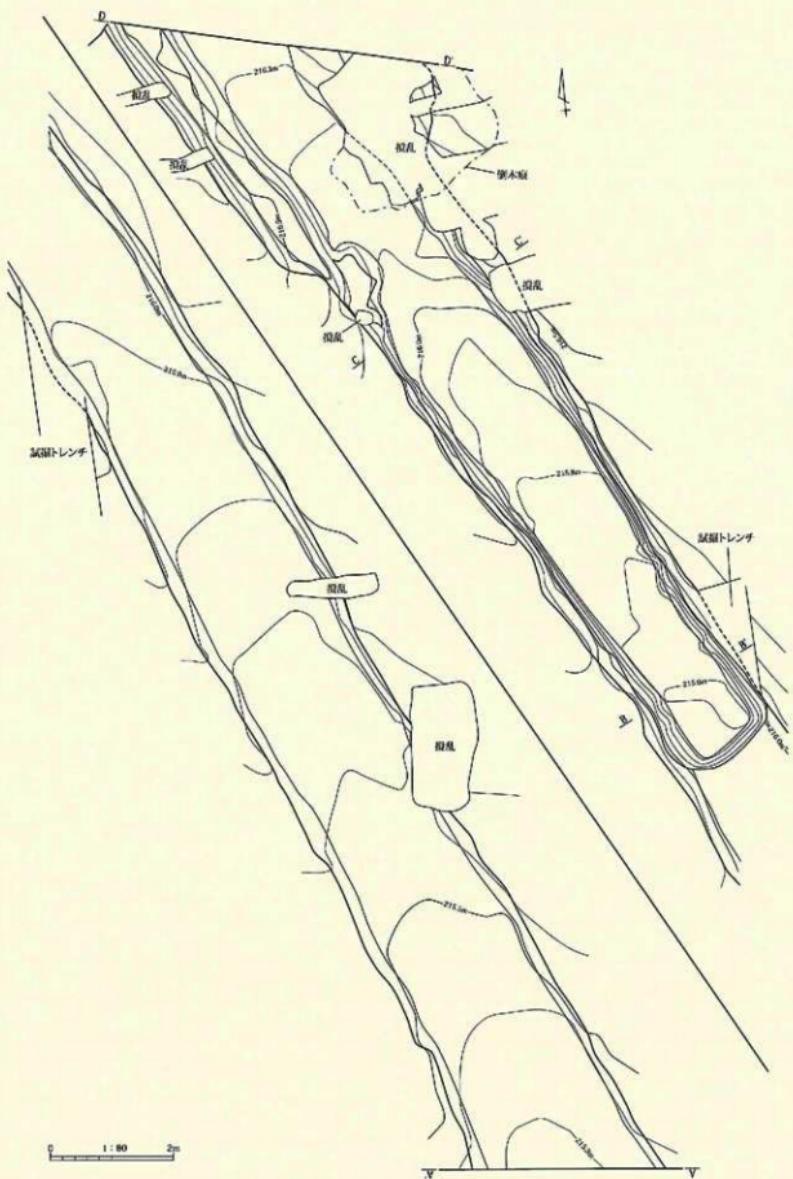
第V章 検出された遺構と遺物

第1節 溝状遺構

本遺跡調査で検出された遺構は溝状遺構1条のみである。確認調査時は2条もしくはそれ以上の存在が予見されたものの、表土除去に伴い遺構の全容を検出した結果、他の遺構は近現代の擾乱であることが判明した。

SD001 (第6~9図 第2表 PL2・3)

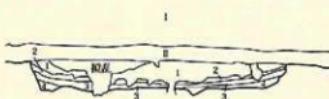
- 位 置 調査区の全域で検出された。南端・北端ともに調査区外へと延びる。
- 形状・規模 北西一南東に直線的に走行する。北端から15.8mでわずかに南へ屈折する。検出長は34.9mを測り、北端では西縁にテラスを有するとともに東縁が広がっており、上端で幅約3.8mを測る。テラスは北端から5.5mで消滅し、以南は幅2.0~2.2mで屈折点まで延びる。屈折点が最も狭く幅1.95m、そこから南端までは幅2.4~2.6mを測る。底面は屈折点を境にして北が一段深く掘りこまれており、北端から屈折点までの深さは0.5~0.6m、屈折点から南端までは深さ0.2~0.3mを測る。底面標高は北端で216.3m、南端で215.3mを測る。断面形状はテラス部を除いて逆台形を呈し、底面は小さな凹凸があるもののほぼ平坦で、硬化部や人為的に設けられた付属施設の痕跡は確認できなかった。
- 覆 土 上層は遺構の南北で違いが認められる。北半では黒褐色~暗褐色粘質シルトでAs-YPと白色軽石粒を含む。この白色軽石はAs-BもしくはAs-Cと思われるが同定はできなかった。南半は暗褐色からにぶい黄褐色の砂質シルトで、部分的に白色軽石を含む。下層は南北ともに黒褐色の砂質シルトの下ににぶい黄褐色粘質シルトが堆積している。上層と下層の土質の違いとB・C断面の堆積状況から、本遺構は埋没過程で掘り直しが行われているものと思われる。更に、上層覆土の下面が乱れていることから、掘り直し後の遺構底面に杭が打設されていた、または樹木が植えられていた可能性がある。なお、土層は全て自然堆積と思われる。
- 遺 物 覆土から4点の遺物が出土し、このうち3点を図示した(第9図)。1の陶器皿は上層から出土したもので、本遺構の埋没年代の上限を示す指標となりえる資料であろう。2・3はともに底面直上から出土した縄文土器破片である。また、図示はしなかったものの中層からは古代と思われる土器器坏破片が出土した。これら中・下層の遺物は二次的な混入物である。
- 時 期 覆土上層出土の遺物の時期と、As-Aが検出されなかったことから近世末には埋没していたと思われるため、構築年代はそれ以前と考えられる。



第7図 SD001 平面図

L-216.80m A

A



A-A'

1. 黒褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 締まり固。As-YP 粒多量、灰白色軽石粒少量、砂少量。
2. 暗褐色 (10YR3/2) 砂質シルト As-YP 粒少量。
3. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトと As-YP 粒の混合層 締まり固。
4. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 砂質シルト少量、ロームブロック少量、As-YP 粒微量。

L-216.40m B

B



B-B'

1. にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト 締まり少、ロームブロック少量、黒色粘土ブロック (ϕ 5 ~ 20mm) 少量、As-YP 粒や多量。
2. にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト 締まり少。
3. 黒褐色 (10YR2/3) シルト 締まり少。下部に黒褐色粘土混じる。締まり固。As-YP 粒多量。
4. にふい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト 硬化が認められる。
5. にふい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルトと As-YP 粒の混合層。

L-216.80m C

C



C-C'

1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト As-YP 粒 (ϕ 2 ~ 5mm) 硬固、白色軽石粒 (ϕ 2 ~ 5mm) や多量。
2. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト 砂質シルト層じる。締まり固。As-YP 粒少量。
3. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトと砂質シルトの混合層 As-YP 粒少量。
4. 黄褐色 (10YR4/2) 黃砂 砂質シルト混じる。As-YP 粒少量。
5. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト (40%) と砂質シルト (60%) の組合層 締まりやや固。As-YP 粒少量、白色軽石粒微量。
6. にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト 締まり固。ロームブロック少量、黒色粘土粒少量、As-YP 粒多量。
7. にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト (50%) と砂質シルト (40%) の混合層 As-YP 粒や多量。

L-217.80m D

D

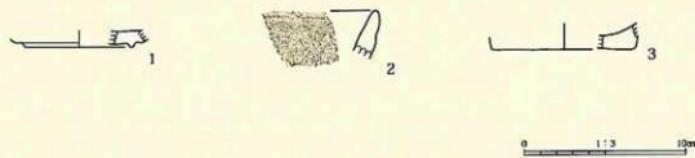


D-D'

1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト ロームブロック (ϕ 5 ~ 25mm) 少量、As-YP 粒 (ϕ 1 ~ 5mm) 硬固、白色軽石粒 (ϕ 1 ~ 5mm) 少量。
2. 暗褐色 (10YR3/3) シルト 締まり固。ロームブロック (ϕ 3 ~ 20mm) 少量、As-YP 粒 (ϕ 1 ~ 5mm) 硬固、白色軽石粒 (ϕ 1 ~ 5mm) 微量。
3. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルトと砂質シルトの混合層 締まり固。As-YP 粒少量、白色軽石粒少量。
4. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルトと砂の互溶 層まり固。As-YP 粒少量、白色軽石粒少量。
5. 暗褐色 (10YR3/3) 砂 As-YP 粒少量。
6. にふい黄褐色 (10YR4/3) ローム・砂質シルト・砂の混合層 黒色粘土ブロック少量、As-YP 粒少量、白色軽石粒微量。

0 1:60 2m

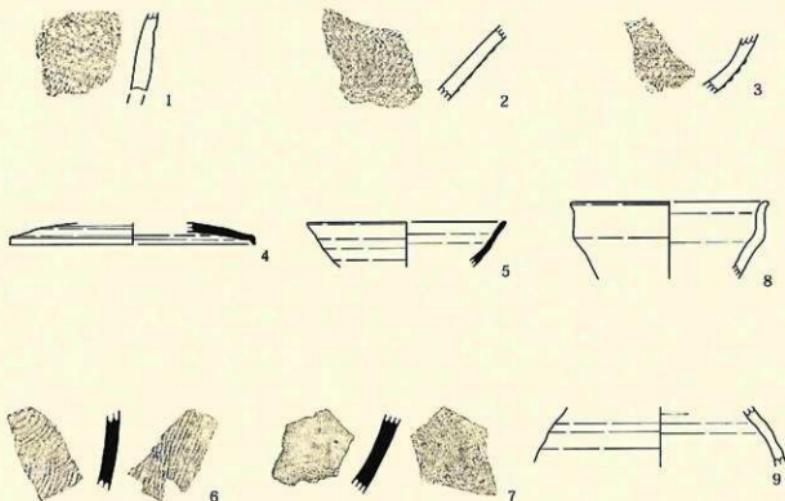
第8図 SD001断面図



第9図 SD001出土遺物

第2節 遺構外出土遺物

調査区内の盛土・搅乱から出土した遺物と調査地、および隣接地の地表から採集された遺物8点を掲載する。1～3は縄文土器破片で、1は胎土に纖維を含み羽状縄文を施す黒浜式、2・3は前期後半の諸磯b式である。器面の曲率と内面が丁寧に仕上げられていることから浅鉢の可能性がある。4～7は須恵器で、4は端部を短く下に折り返した蓋、5は薄手の坏である。ともに9世紀頃のものと思われる。6・7は斐類の脇部破片である。8・9は陶器で、8は近世のいわゆる白天目の茶碗である。9は器種不詳。とともに産地は瀬戸美濃と思われる。



第10図 遺構外出土遺物

第2表 出土遺物観察表

溝状遺構 (SD001)

No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調 (外側・内側) / 構成	船上	特徴・調査・文様等
1	割離 皿	SD001 上刺	口：一 高：(1.0) 底：(6.0) 底径1/4 外：黒褐色 内：灰白色／やや良	断面：灰褐色	志野皿。削り出し高台。外：無釉。内：白色釉。浦戸美濃。17世紀初頭。
2	圓文土器 深鉢	SD001 底面	高：(3.0) 厚：1.1 口部破片 底部破片 内：灰褐色／やや良	砂粒、白色釉、織謹	無文。縦文溝滑継手。盤底式進行か、二次的切入遺物。
3	圓文土器 深鉢	SD001 底面	高：(1.0) 底：(8.8) 底部破片 内：灰褐色／やや不良	砂粒、角閃石、 白色釉	無文。圓文時代前期持手か。二次的切入遺物。

追加外

No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調 (外側・内側) / 構成	船上	特徴・調査・文様等
1	圓文土器 深鉢	底面内 (芋穴)	高：(4.0) 厚：1.1 脚部破片 外：黒褐色 内：灰褐色／やや良	砂粒、角閃石、 白色釉、織謹	粘土羽状織文で菱形モチーフを描出する。圓文前期開拓式。
2	圓文土器 深鉢	底面内 (芋穴)	高：(4.5) 厚：0.9 脚部破片 外：灰褐色 内：灰褐色／良好	砂粒、角閃石、 白色釉、織謹	表面にし残文を飾文し、3条1組の刻目ある浮縫で文様を描く。圓文前期諸様式。
3	圓文土器 深鉢	1号	高：(3.6) 厚：0.8 脚部破片 外：黒褐色 内：灰褐色／やや良	砂粒、角閃石、 白色釉	表面にし残文を飾文し、4条の刻目ある浮縫で文様を描く。圓文前期諸様式。
4	須恵器 蓋	追跡 北端	口：(1.0) 高：(1.3) つまみ紐：一 口縁～天井部破片 外：灰褐色 内：灰白色／良好	粗砂粒、白色釉	ロクロ成型。外：天井部脚付へラケズリ。内：ナデ。
5	須恵器 环	追跡 北端	口：(1.2) 高：(2.7) 底：一 口縁～天井部破片 外：灰褐色 内：灰褐色／良好	粗砂粒、白色釉	ロクロ成型。外：脚軸ナデ。内：脚軸ナデ。表面にφ 0.5mm程度の損点多数。9世紀化。
6	須恵器 置か	追跡 端	高：(4.0) 厚：0.7 底：一 体部破片 外：黒褐色 内：灰褐色／良好	粗砂粒	外：平行叩き。内：同心円状當て良好。
7	須恵器 置か	底面内 (芋穴)	高：(4.0) 厚：0.9 底：一 脚部破片 外：黒褐色 内：灰褐色／良好	粗砂粒	外：調査不明顯。叩きか。内：ナデ。表面にφ 1mm程度の斑点多数。
8	須恵器 天井茶碗	追跡 北端	口：(1.0) 高：(4.7) 底：一 口縁～脚部1/6 灰褐色／良好	断面：灰白色	白天目。外面・内面：全面白色釉。浦戸美濃。17C 初頭。
9	陶器 置か	底面内 (芋穴)	口：一 高：(3.7) 底：一 体部破片 外：灰褐色 内：灰褐色／良好	断面：灰褐色	外：鉄輪。内：無釉。断面端にわずかに鉄輪。浦戸美濃。17C 初頭。

第VI章　まとめ

第V章で記述したことと重複するが、SD001は概ね幅2～2.6m程の直線的な溝状遺構である。南向きの斜面に等高線と直交する方向で構築されているため底面での比高差は30mあまりの検出範囲で1m以上にもなる。形状で特筆すべきは、中央やや北寄りを境にして北半と南半で幅・深さが異なる点と、更に方向もわずかに屈折する点であろう。別個に掘削した溝を連結したような印象を受けるが、下層に堆積した土層は南北でほぼ同質であることから、構築に時期差はないものと考えられる。覆土に関して追記すると、堆積していた土層は全て自然堆積であり、砂は混じるものの中入物や堆積状況から水が流れていた痕跡はないと判断できる。また、遺構埋没過程で少なくとも1回掘り直しが行われた形跡があり、掘り直し後の底面にあたる上層が激しく乱れている。

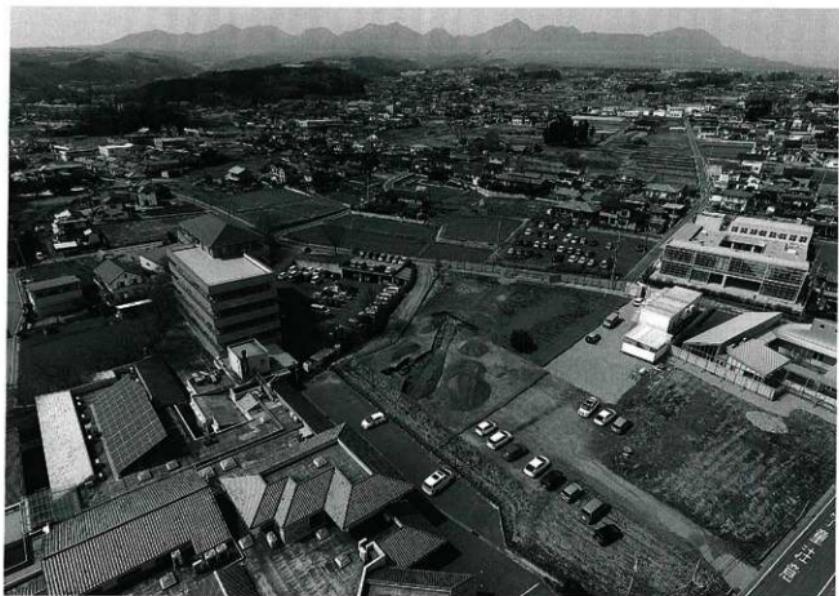
本遺構の性格については、遺跡周辺で水田耕作が行われていなかったこと、底面の傾斜が急であること、覆土の土質などから、農耕に伴う灌漑施設とは考えにくい。地境・区割溝の可能性については、幅2m以上、深さ数十センチ以上という規模はやや大きいように感じられるが、地割としての役割は十分に果たすことができるのでその蓋然性は高いと考えている。一方、防御を目的とした塹としては深さが足りないように思える。削平されたことを勘案しても構築時の深さは1m程度と推定され、十分な防御機能を持たないであろう。ただ、土塁が存在した可能性、さらに覆土の堆積が乱れていることを逆茂木や植栽の痕跡とみれば、簡易的な防御施設と考えられなくはない。根拠としては弱いが、本遺構の性格としては基本的には地割溝であり、防御機能を有していた可能性も考えたい。

次に本遺構の構築時期であるが、調査で得られた情報からはこれを断定することはできない。ただし、覆土上層から出土した遺物が17世紀初頭に位置づけられること、As-Aテフラが検出されなかったことの2点から埋没時期は17世紀初頭以後、19世紀中頃までの間とみられる。さらに、本遺跡、および周辺から出土・採集された遺物に17世紀前半以後のものがないことから、本遺構の埋没時期として蓋然性が高いのは17世紀前半までであり、逆算して構築時期を推定すると16世紀後半から17世紀初頭頃ではないかと推定できる。これは箕輪城が長野・武田・織田・北条・徳川と次々に支配者が変わる争奪戦の渦中にあった時期であり、箕輪城外郭、砦、および城下の整備の一環として本遺構が構築されたと考えられなくはない。なお、本遺跡周辺は、箕輪城南東方向の物見に適した地形であることも附記しておく。調査事例としては甚だ不十分な状況ではあるが、本地域の戦国期の一様相を伺う遺跡として、ここに報告したい。

主要引用・参考文献

- 秋本太郎 2008 「I 遺跡の立地と環境・II 箕輪城概説」『史跡箕輪城跡Ⅴ』群馬県高崎市教育委員会
- 田口一郎ほか 1982 『生原・田島・大清水遺跡』箕郷町教育委員会
- 田口一郎ほか 1986 『生原・善能寺前遺跡』箕郷町教育委員会
- 田口一郎ほか 1988 『海行A・B遺跡』箕郷町教育委員会
- 日沖剛史ほか 2009 『全徳森遺跡』高崎市文化財調査報告書第236集 高崎市教育委員会
- 水谷貴之 2010 『生原・天神前遺跡』高崎市文化財調査報告書第256集 高崎市教育委員会
- 村上章義ほか 2009 『生原・林木遺跡』高崎市文化財調査報告書第245集 高崎市教育委員会
- 高崎市史編さん委員会 2003 『新編高崎市史 通史編Ⅰ 原始古代』
- 箕郷町誌編纂委員会 1975 『箕郷町誌』箕郷町教育委員会
- 箕郷町教育委員会 2005 『史跡箕輪城跡Ⅴ』

写 真 図 版



遺跡遠景（南東から）



調査区全景（左が北西）



調査区完掘全景（北西から）



SD001 全景（南東から）



SD001 北半（南東から）



SD001 上層断面 B-B'（南東から）



SD001 土層断面 C-C'（南東から）



基本土層 1（東から）



基本土層 2（西から）



調査風景



1



2



3

SD001 出土遗物



1



2



3



4



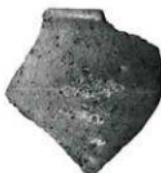
5



6



7



8



9

造构外出土遗物

報告書抄録

フリガナ	ヤバラツカゴシイセキ
書名	矢原塚越遺跡
副書名	地域密着型特別養護老人ホーム・介護老人保健施設増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第392集
編著者名	福嶋正史
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井 311-1
発行年月日	2017年7月31日

所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ヤバラツカゴシイセキ 矢原塚越遺跡	高崎市箕郷町 大字矢原字塚越 13番1、15番3	102024	698	36° 23' 52"	138° 57' 46"	2017.3.24 ~ 2017.4.5	193.0m ²	老人ホーム・ 介護老人保健 施設増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢原塚越遺跡	散布地	縄文時代		土器	
		古代		土師器・須恵器	
	その他	戰国期	溝状遺構	陶器	
要約	高崎市箕郷町の榛名山南麓に位置し、北西約1.4kmには戦国末期の上野地域の主要城郭である箕輪城がある。井野川東岸の緩い舌状台地上に傾斜に沿った直線的な溝状遺構が検出された。土地の利用履歴から農耕に伴うものとは考えにくく、区画を目的としたものと思われるが、やはり規模が大きくそれ以外の目的も考え得る。遺物はほとんど出土せず、覆土上層から出土した陶器破片は17世紀初頭のものである。遺構の構築時期は16世紀～17世紀初頭と考えられ、城外郭や城下の整備に伴う遺構である可能性が考えられる。				

矢原塚越遺跡

—地域密着型特別養護老人ホーム・介護老人保健施設増築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成 29 年 7 月 31 日 印刷

平成 29 年 7 月 31 日 発行

発 行／高崎市教育委員会

高崎市高松町 35 番地 1

TEL 027-321-1291

印 刷／細谷印刷有限会社
